

役割

この世界に生きる人は皆、誰しもが『役割』というものを持っている。

その人生で果たすべき『役割』を果たす事こそが目的であり、生きる意味なのだ。

……などと、そんな高説を書き連ねたい所だが、残念ながら人の生にそう分かりやすい目的など付与されてはいない。

「この世は舞台、人はみな役者だ」と、かの有名な劇作家ウィリアム・シェイクスピアは言った。

この何とも詩的な言葉を認め浮き世が舞台であったとて、人は役者では在り得ない。

喜劇も悲劇も歌劇もこの世には在ろうが、人生に誰ぞに与えられた役割、それだけは存在しないものと断言出来る。

その点において、我々人は限りなく自由であると言えるだろう。

仮に、我々が舞台上の役者であったならば人生における一つ一つの選択をアドリブとも言い換えようが、そこは先に否定しておいたので考えないものとして、だ。

現代に生きる我々には、自由と言って差し支えないまでの数多くの選択肢が存在する。

スポーツ選手になりたい、警察官になりたい、パティシエになりたい、お花屋さんになりたい、政治家になりたい、大金持ちになりたい。

或いは巨大ロボに乗ったり仮面姿で悪と戦ったり、プリティでキュアッとした存在に憧れるのも個人の自由だ。

それは言葉を変えれば夢や希望とも呼ぶかもしれない。

そしてその自由の多くは、惜しくも人が成長するにつれ失われていく類のものだ。

幼少から社会を知れば次第に現実的で無理がなく、より自身の能力に即した分相応な選択肢から未来を取捨選択していく。

それが人の大多数が歩む、平凡でありふれた自由な道程だ。

もしかすると、そうした消去法の果てに掴み取られた選択に自由など無いと、そう思う人も居るかもしれない。

――だがもし、もしもだ、そんなささやかな自由すらも与えられない世界があったとしたなら、そしてその世界を見てしまったとしたなら、今ある自由にだって多少なりともありがたみが生まれるというものではないだろうか。

と、最後はお世辞にも綺麗とは言えないこじつけじみた導入となってしまったが、そこは大目に見てもらおうとして。

――これよりご覧頂くのは一つのフィクションのお話。

何かが違った IF 世界、致命的なまでに離れたパラレルワールド。

夢も希望も存在しない、淋しい世界にお招きしよう。

——視線の先、宙を舞った空き缶が間抜けな音を立ててアスファルトの地面を転がっていく。

「……………」

乾いた晴れ空と空き缶は何とも mismatch で、完全に飲み切っていたのか中身が零れ出なかった事だけが不幸中の幸いといえる。

その空き缶だが、何も一人で吹き飛び冷たい地面に落ちた訳じゃ無い。

やったのは前を歩くまだ若い青年二人の片割れ、大学生だろうか、今も楽しそうに笑いながら罪悪感などまるで無しに歩き去って行った。

「……………」

僕は溜息を吐きつつ近づいて行って屈み、寒いからとポケットに突っ込んでいた手を出して空き缶を拾う。

手元でぐるりと回せば、空き缶の正体は大手飲料メーカーの出している缶コーヒー、それも炒ったコーヒー豆のラベルされた僕の好きなブラックだ、やるせない。

もう温度を失って久しいそれを手に、僕はどこか捨てる場所はないかと視線を巡らせつつ歩き出す。

誤解の無いよう言うておくが、僕は何もポイ捨てが許せない等という正義感や、見てしまった以上自分が捨てなくてはならないという使命感に駆られて空き缶を拾った訳では無いのだ。

もしもそんな綺麗な動機で行動に移せたならどれだけ良かっただろう。

誰に見られるでもない SNS にこの行動を発信し、誰か一人位にはまだこの世の中も捨てたものでは無いと思ってもらえたかもしれない。

しかし残念な事に僕のこれはそんな高尚な代物ではなく、ただただ後ろ向きなだけの義務感に過ぎなかった。

——この世界では、丁度二分の一成人式を行う十歳の時に国から『役割』を授かる事となっている。

『役割』とはその人が人生を通して行わなければならない仕事であり、言い換えれば変えようの無い天職というものだ。

与えられた『役割』は適性の有無、やりたいやりたくないに拘らず従事しなければならず、その旨は法律にも細かく記述されている。

スポーツ選手も警察もパティシエも政治家も、遍く全ての職業が選定方法も不明なまま国民に与えられるのだ。

それで世間が上手く回っているのだから文句の付けようも無いが、それでもこうして割を食っている身からすれば素直に受け入れられよう筈も無い。

数ある『役割』の中で僕に割り当てられたのが清掃、とりわけ町中のという地味で退屈な仕事だ。

勿論誰かがやらなくてはならない仕事なのだとは頭では理解しているし、この仕事に従事する他の人を貶す意図は無いが、それはそれとして自分にはほとんど合わない仕事ではある。

僕は再度溜息を吐き、コーヒーの空き缶をゴミ箱へ叩き込んだ。

夜も更けて微かな明かりが照らす中、ズボンの右ポケットからキーケースを取り出し、がちゃがちゃと音を鳴らしつつ鍵穴に差し込み、ドアを開けて後ろ手に閉める。

ただいまは言わない、言う相手も居ないのだから、マンション一人暮らしの男が独りで呟いても気持ち悪いただけだろう。

帰ってきてすぐにやる事と言えば、今しがたコンビニで買ってきた弁当を電子レンジで温める事だ。

ここ三年近くまともな食事をとった覚えが無いが、まあそれも全てはどうでもいい事だろう。

僕の人生は既に、日々を生きる事だけで精一杯になっていた。

過熱を終えた弁当をレンジから取り出し、ビニールの内に付いた水滴に火傷しそうになりながら、中身を順次口に放り込んでいく。

疲労し切った脳は何を考えるでもなく、まさに脳死で割り箸を動かして、僕は精神的な暇を潰す為に適当にテレビを点けた。

電源が点いてすぐ、テレビからは今日一日を振り返る深夜ニュースが大音量で吐き出される。

僕は思わず顔を顰め、急いでテレビの音量を下げた。

溜息を吐きつつ食事を再開する僕の耳には、別段面白くも無いおじさん二人のやり取りが流れ込んでくる

『近頃問題となっているのが、人口増加によって生まれてしまった「自由」という「役割」、俗に言われる無職の方々の存在ですよ』

『ええ。社会主義は働きたくても働けない、社会的な立場の弱い方を救い上げる事の出来る素晴らしいシステムですが、だからといって労働力を持つ人が働かないというのは問題だと思います。「役割」が配布されるにもかかわらずこうした人々が生まれてしまうのは一体どのような要因があるのでしょうか』

『我が国の人口は年々増加の一途を辿っており、それに従って一つあたりの「役割」に従事される方々が飽和してしまっているんですね。その結果今年の8月には遂に全「役割」の稼働率が100%を超え、溢れてしまった人々が無職化しているという訳です。なので無職の方々も働かないのではなく、あくまで働けない立場であるという事は我々も認識する必要があるんですよ』

『そうだったんですね。〇〇先生のお話を聞くまで知りませんでしたよ、いやお恥ずかしい』

『問題として取り上げられ始めたのは本当に最近ですから無理ありませんよ。しかしこれからはそうも言ってもらえません。我々は社会主義の世の中を維持する為にも、一丸となってこの問題に対処しなければならないのです。我々一人一人がこの問題を正しく認識し、不当な誹謗中傷をせぬように努め、国は国会による無職問題への対処が急がれます』

弁当を食べ終えた僕は話も一区切りした所でテレビの電源を切り、プラスチックごみをゴミ箱へと捨ててからベッドへ直行。

帰って来てからシャワーの一つも浴びていないが、そんな気力も無い。

最低限の栄養を得て満足した僕の身体は、横になって一分と経たずに意識を手放した。

次の日、などと銘打ってみてなんだが、今日も今日とて管轄内の路上清掃とゴミ拾いの日である。

人間は生きていだけで汚す生き物であり、世界人口の1%にも満たない清掃員の仕事が無くなる訳が無いのだ。

僕の人生に変化は無い、僕の人生に変化は要らない、ただ変わる事の無い日常に、平穩に浸って死ぬまで生きていたい。

僕がそんな風に信じながら生きていたのは、今日この日までの事だった

昨日の夜はどうも強い雨が降っていたらしく、路地の入口に在ったゴミ箱が横倒しになっており、そこから溢れたゴミが濡れた地面に散乱している。

それが人為的なものかカラスや猫などによるものかは分からない、少なくとも僕にとってはどうでもいい事だった。

ただ濡れた地面と散らばったゴミという、あまりにも不快な組み合わせに辟易しただけだ。

この仕事を始めて吐き慣れた溜息をまた一つ重ね、腰を屈めてビニール袋に詰め込んでいた、そんな時だった。

「―――」

路地の少し奥、大通りからは見えずらい場所で男女が言い争う声が聞こえてきた。

覗いてみれば男女比は2:1、嫌がる少女の表情を見るに男二人にしつこく声を掛けられているようだった。

少女の格好はいわゆる今時の女子高生といった風貌でこれといった特徴は無く、制服では無いが見た所年齢的にはそれくらいの子に見える。

対して男二人は金髪で軽薄そうな風情、この時間に出歩いている事を思うに大学生だろうか？は見るからに健全な目的で声を掛けている訳ではなさそうだ。

「……はぁ」

溜息を吐く、溜息一つくらい吐いていなければやっていられない。

こっちが朝早くから夜遅くまで清掃の仕事をしているというのに彼らは何だ、白昼堂々ナンパとはふざけているのか。

だから今から出る行動はそう、善意や正義感などという高尚な動機では無い偽善だ。

ただ自分の境遇と比較して腹が立ったから、男二人にムカついたからする八つ当たり行為に過ぎない。

「すみませーん。そここれから掃除するんでどいてもらってもいいすかー？」

三人分の視線が僕に集中する。

内二人は怪訝な、内一人はやや驚いたような表情でこちらを見ている。

ああ、これだけ多くの視線を向けられたのは一体いつぶりの事だろうか。

「あぁん？見て分かんない？俺らこの子と取り込み中なんだけど」

「関係ない奴は引っ込んでろよな」

「そうは言われても、見て分かりませんか？僕今清掃中なんですよー。『ゴミ』掃除の真っ最中」

語尾は間延びさせて相手がイライラするような話し方に、返ってこない相手に敬意を払う程僕はお人好しでは無い。

わざとらしく言葉遣いを悪くした甲斐あって目的は果たされ、男二人が剣呑な雰囲気

纏って僕に近づいてくる。

しかし挑発しておいてなんだが僕に腕っぷしの自信は無い、日々の重労働で体は常にバキバキボロボロだ。

一触即発の空気はお構いなし、僕は二人の態度を丸きり無視して男達の近くの掃き掃除を始めると、汚れる事を嫌ってかそそくさと通りの方へと行ってしまった。

去り際、ご丁寧に纏めたゴミを蹴り散らかしていく小物っぷりに安堵しつつ、僕は「図らずも」助ける形になった少女の方を振り向く。

「――ありがとうお兄さん。おかげで助かったよ」

そう話し掛けてきた少女は敬語を使っていなかったが、別に腹は立たない。

先程は敬意がどうのと言っていたが、僕は元々そこまで言葉遣いに過敏な人間ではないのだ。

「別に気にしないで、当然の事をしたまでだよ。それじゃあ僕はこれで」

どこかで聞いたような台詞を口にしつつ、僕は直ぐに散らかされた路地の清掃作業へと移る。

見返りを期待しての行動では無いし、偏見かもしれないが少女も淡泊そうに見えたのでその後のやり取りはないだろうと高を括っていたのだ。

だが、

「あ、待ってお兄さん。一応助けられたお礼がしたいからさ、掃除のお仕事手伝わせてよ」

その思わぬ申し出に表情を繕う事も忘れて振り返る、もしかすると一瞬嫌な表情か迷惑そうな表情を浮かべてしまったかもしれない。

僕とは違い純粋な善意からの申し出だったのだろうが、正直言って面倒だった。

人との会話が下手な僕が生んでしまうと容易く想像出来る、気まずい空気を避けるべく、僕はその場の思い付きで少女の手伝いを断る言葉を考える。

「えーと……気にしてるなら大丈夫だよ。いつもやってる事だし、これが私の『役割』なんだ。君にも君の『役割』があるだろう？お互いの『役割』に集中した方が良い。それに、この仕事は見かけによらず重労働だし、見ての通り凄く汚れるんだ」

僕にとっては善意の有無も真面目なのかの真実もどうでもいい、こんな汚れる仕事をさせたくないという親切心では無い、ただあるのは自分の仕事を邪魔をされたくないという

利己心だけだ。

表面上はにこやかに、長らく浮かべていない笑みはきっと引き攣っていただろうが、かえって断る空気を出すのに買っただろうか。

遠回しに申し出を断られた少女は、僕の言葉を受けて意図を察し――

「わたしは別に気にしないし、わたしがやりたいの。迷惑はかけないし、いいでしょ？」

なかった。

それどころか僕に無断でゴミを拾い始め、勝手にビニール袋に詰め始めたのではないか。驚きと戸惑いが交錯する中、僕はしばらく立ち尽くしてしまった。

彼女の突拍子もない行動は、日々の単調な生活に突如として現れた異分子のようだった。

僕が呆気にとられる間にもゴミ拾いを進めていく少女は意外にも思い切りが良く、また手際も良かった。

普通の感性を持っていれば多少躊躇いを見せても良い筈なのだが、何とも変わった少女である。

とは言え流れのまま手伝いを認める訳にもいかず、その後もどうにか説得しようと試みたのだが、

「その、職業体験！学校の課題なんだ。もちろん恩返しの意味合いもあるよ？けどこれも何かの縁ってことで、協力してくれると嬉しいな」

職業体験といえば、『役割』によって比較が困難な多職種の業務を実地で学ぶ、高校生が一度は経験する課外授業である。

次代の育成という点から国が推している活動であり、そんな背景もあって事実上こちらの拒否権を剥奪する最強の文言だ。

実際に僕は彼女の申し出を断る口実を失い、少女と二人で仕事をする羽目になってしまった。

いや、ここまでうだうだと悩んでいてなんだが、僕は別にこの少女に手伝ってもらうのが絶対に嫌という訳では無いのだ。

一人から二人になった事で作業効率は向上するし（道中作業の指示や手本を見せる過程でロスが発生するが）、将来この国を支える世代を育てるという有意義な行為にも繋がる（僕にそうした高尚な考えは存在しないが）。

それでも僕が渋ったのは、単に自分のペースを乱されるのが嫌だったからだ。

ただでさえ孤独な性格の僕が、見知らぬ少女と共に仕事をするなんて、考えただけでも気が重い。

「……分かったよ。ただしやる気が無いと僕が判断したらすぐにやめてもらうからそのつもりでね。それから、今日はもう帰りなさい。こんな時間から何をしてたのかは知らないけど、学校だってあるだろう？手伝うなら明日から。いいかい？」

「……もちろん。やるからには精一杯やるつもりだから。それじゃあ明日からよろしくね、お兄さん」

そう言って静謐に笑う少女と僕は、短くて奇妙で、しかし人生に大きな影響を与える時間を共有する事になる。

それは人生の転換点、ターニングポイント、運命の分かれ道、まあ本質さえ変わらなければ言い方はどうでもいい。

ただ、僕にとっても彼女にとっても、この出会いはきっかけだった。

ともあれ今はありきたりな言葉で濁しておくとしよう。

——この出会いが如何なる影響を与えるのかを、僕達はまだ知る由も無かった。

「おはよう、お兄さん」

「あ、ああ、おはよう。それじゃあ始めようか」

翌朝、いつも通りの時間に目を覚ましいつも通りの時間に家を出た僕は、昨日指定していた場所で少女と合流した。

着いたのは約束の時間の二十分前、少女が少しでも遅れようものなら容赦無くクビを言い渡すつもりだったのだが、よもや僕よりも早く着いて待っているとは当てが外れた。

……それにしても何だろうか、いつも一人で始める仕事に誰かが居るとするのは、何とも妙な感覚だ。

それが一回りも年齢差のある少女の、笑顔交じりの挨拶も伴っていれば尚更。

新鮮な感覚ではあるのだが、どこか一方的な気まずさも感じている。

これは早く仕事を始めた方が良さそうだ、そうして僕らは清掃作業を開始した。

とは言え特筆して記すような内容は一つとして無い。

そこそこの重量がある掃除道具を僕が持って歩きながら、汚れを落としつつ目立つゴミを回収する。

特にこの時期は街路樹の枯葉が街中に溢れている為、枯葉の回収作業が主な業務内容となる。

もう何年もこの仕事を続けている僕にとっては、こういった季節ごとの清掃も最早新鮮味の無い作業である。

とにかく眼前の枯葉とゴミを無駄なく片していく。

黙々と、黙々と。

「そういえばお兄さんって今いくつなんだっけ？ぱっと見だと……20 くらい？」

「一応 26 だよ」

「へー意外。思ったより年上なんだ。けどまだギリギリお兄さんって年齢だし呼び方はこのままで良いよね。それとも、先輩とか他の呼びの方がよかったりする？」

「いや、呼びやすい呼び方で良いけどね。僕としては今のままでも構わないよ」

「おっけー。じゃこのままでいこうかな」

黙々と。

「ここ最近すっかり寒くなったよね。ついこの間まで暑い暑いって言ってたのに。わたしの家ウィンドウエアコンだから隙間風がきつくてさ」

「確かにめっきり冷え込むようになったね。最近は気温の変化が急すぎてついていけないよ」

「なにそれ、お年寄りみたいでウケるね。この先どんどん寒くなっていくだろうし気を付けてよ？体壊さないようにね」

「あ、ああ……ありがとう？」

黙々と……

「そういやこの間駅前のケーキ屋さんで新商品が出ててさ、それが興味本位で買って見たらすごいおいしくて、毎週のように食べてるんだ。結構甘めだけど後を引かない甘さっていの？もう無限に食べれちゃうから体重が大変で大変で。それからそのケーキさんはそれだけじゃなくてね」

正直言ってこの年代の少女を舐めていた、まさかここまで話題の回転が速いとは思っていなかった。

こうして職業体験を受け入れた時点で多少世間話をするくらいは覚悟の内だったが、人と話す機会に乏しい僕にはとってこれはあまりに重労働だ。

幸いと言うべきか情けないながらと言うべきか、少女の話術が達者なお陰で会話と会話の間に生じるあの気まずい空気は今の所発生してはいなかった。

間髪入れずに話題を入れ替え、表情と感情をコロコロ入れ替えつつ楽しそうに話すその姿は実に微笑ましい。

それに引き換え僕はどうかろう、少女の投げ掛けてくる話題や質問に短く返答をし、それに対して返してもらった言葉にまた短く返答をする。

会話は言葉のキャッチボールと言うが、これではあまりに一方通行過ぎる。

かと言ってコミュニケーション力に欠ける僕ではこれ以上の会話もままならない、ほとんど自分の無力さに呆れるばかりだ。

そのような流れでその後も仕事を続け、職業体験一日目は何事も無く無事に刻限を迎えた。

それから僕と少女は毎週のように一緒に業務をこなした。

毎日とはいかないのは少女の学業を慮っての事だ、それに僕が疲れるというのもあるが。

ともあれ当初危惧していたようなやる気の喪失も見受けられず、概ね順調に日々は流れて行った。

少しだけ変わった日常にも慣れ、他人との会話も少しは上達したある日の事だ。

「先週の公園の清掃楽しかったね。場所が場所だけに葉っぱの量はすごかったけど、いつもと違う場所で気分転換になったし新鮮だった」

「そうだね。丁度遊んでた幼稚園児達に絡まれたのはちょっと辛かったけど」

「めっちゃたかられてたよね。わたしお兄さんの困ってる表情見て笑っちゃった」

「あの年代の子は加減を知らないんだから笑ってないで助けて欲しかったよ……。そう言う君だって結構絡まれてたんじゃない？大丈夫だった？」

「わたしの方はみんないい子だったよ？特に困るようなことはなかったかな」

「なんという格差……。やっぱり年の近いお姉さんには普通に接するんだろうか」

「そうやってなよなよしてるから舐められるの。もっと堂々としてれば向こうだってそれ

なりの態度で来てくれるよ」

その日も何という事はない、工作中的暇を潰す話題を提供してくれる少女に対し、拙いながらも答えを返しつつ会話をしていた。

しかし拙いとは言ってもこの一か月近くで随分と鍛えられたもので、僕としてはそれなりに、人並みには話せるようになったという風に自負していた。

だからこの後上がった話題に関しても、そうした暇潰しの一環だったのだろう。

「お兄さんはさ、子供の頃夢とかなかったの？」

「……夢かい？」

何でもない表情で突然にそう問われ、僕は咄嗟に表情を作る事も忘れてオウム返し。直ぐに返せなかったのはきっと、自分の中で未だに消化し切れていないからだ。

「そう、夢。お金持ちとか野球選手とかお花屋さんとかお嫁さんとか、そういうの。お兄さんにも一つくらいはあったんじゃない？」

「夢……夢か……」

そう言って考える仕草を取るが、僕の中でこの質問への回答は既に決まっていた。

「特に無いかな。僕は昔からすぐに他人の影響を受けるような、それこそ隣の席の子の夢をそのまま描くような子供だったよ。ある時は消防士、ある時は学校の先生。それも本気で願う事もしない夢だった。そもそも、『役割』なんてものが存在する以上夢なんて抱いていても、虚しいだけだなんだよ」

夢の実現の可能不可能だなんて、少女の質問には一切含まれていなかった事だ。

僕はいつも通りに聞かれた内容にだけ答えて、そこから会話を広げてもらえればそれで良かった筈なのだ。

だというのに、僕の口は胸の内に生じた熱をそのままに言葉を紡いでしまう。

「『役割』っていうのは詰まる所、一つの仕事への永久就職だ。それも自分の意志では泣いて喚こうが離職の叶わない、ね。そうなれば当然副業って形になる訳だけど、それじゃ大抵の夢に挙げられるような仕事は出来ないんだ。そりゃ中には好きな事と『役割』を両立してる人も居るんだろうけどね、そんなのはごく一部だよ。僕みたいな人間は与えられた『役割』

を果たすだけで精一杯、夢なんて」

吐き捨てるように言い放って、気まずい雰囲気直ぐに後悔して、それでも発言を取り下げる事はしない。

これは紛れも無い僕の本心だ、それが例え暇潰しの世間話だったとしても濁すような事は出来ない。

それでも少しくらいはと、この心地良い関係を惜しむ気持ちが勝って誤魔化し笑い、図らずも重くなってしまった空気を打ち消そうと試みる。

だがその対処も少しばかり遅かったようだ。

「……そっか。お兄さんもそう思ってるんだ。真面目だね、お兄さん」

落胆、失望、諦観、そんな感情が少女の瞳を過ぎり、僕の胸がぐっと締め付けられる。選択を誤った、ただその確信と焦燥感だけがあった。

「——わたしね、『役割』が『自由』なんだ」

「っ……」

目を伏せた少女の告白に、僕は思わず息を呑む。

『自由』、それはつい一か月前に何となく付けたニュース番組でも取り上げられていた社会問題。

増えすぎた人口と社会の噛み合いで起こった、『役割』というシステムの弊害。

テレビと噂でしか聞かない存在だったが、まさかこんなにも身近に居たとは思ってなかった。

「それ、は……」

「わたしは 10 歳になっても何ももらえなかった。みんなが当たり前で与えられる『役割』を与えられなかった。その時は思ったよ？みんなと違うのは嫌だけどこれなら夢が叶うって、誰に縛られることもない、自由を手に入れたんだって。けどね、自由なんてなかったよ。むしろわたしの人生はそれからずっと自由に縛られてた」

そこから少女が語ったのは現代社会の闇、少女の抱える心の闇だった。

「学校に行けなくなった。当たり前だよ、みんなそれまでの夢とか漠然とした将来設計と

か、そういうの全部台無しにされて『役割』のこと考えなきゃいけないのに、わたし一人だけ何もしなくていいんだもん。知ってる？『役割』って働き始めたその瞬間から給料が発生するの。だから何もしてなかったわたしは10歳で『自由』になった月からお金をもらってた。そりゃ浮くよ。友達も先生もわたしから距離を取るようになった。中学に入学するまではなんとか通ってたけど、そこからはもう駄目だった」

言葉を挟む余地が無い。

少女の言葉を遮るには、僕の言葉はあまりにも重みに欠けていた。

「友達に裏切られて、先生に見放されて、最後に縋った両親もわたしを助けてはくれなくて……やるせなかったよ。だってそうでしょ？これはわたしが選んだことじゃないんだもん。わたしのせいじゃない。……いっそわたしの選択の結果なら諦めもついたのに。人に与えられた『自由』で自由じゃなくなるなんて、そんなことってないよ。まあ一人暮らしには憧れてたけどさ、まさかこんな形で叶うなんて皮肉だね」

口元だけを笑ませる少女の目は全く光を宿していなかった。

それ程までに少女の闇は深かったという事なのだろう。

それは或いは僕の挫折すら些事であると感じてしまう程に。

「何もしてない自分を変えたくて足掻こうにも、こんな『役割』のせいでまともにアルバイトも出来ないんだよ？わたし一人の努力なんて、大多数の先入観で簡単につぶされちゃうの。本当に生きにくい世界。——けどね、わたしはそれでもあきらめたくない。どれだけの向かい風でも、誰が何を言っても関係ない、わたしにはわたしの夢がある。ありきたりかもしれないけど、たった一回の人生、折角見つけた夢をあきらめるなんてもったいないじゃん」

それでも少女は折れていなかった。

世間の逆風や挫折に疲れた表情で、どこか寂しそうにしつつもその口元は笑みを浮かべていたのだ。

口元だけではない、先は仄昏い諦観を宿していた瞳にも、弱々しくも確かな希望の光が灯っていた。

そう、少女は何一つとして諦めていなかったのだ。

「——わたしね、将来はケーキ屋さんをするのが夢なんだ」

「ケーキ屋、さん……？」

「そう。ってそんなに意外かな？わたし結構お菓子とかケーキの話してたと思うんだけどな」

「あ、ああ。確かによくしてたね。そうか、ケーキ屋さんか」

「うん。そのためにもアルバイトで資金を溜めたいんだ。『役割』だけでも十分お金は入って来るけど……どうせなら自分で努力して稼いだお金でやりたいじゃん？無意味なこだわりかもしれないけど、気持ち的にね」

「いや、分かるよ。そういう信条というか考えていうのは僕も大事なものだと思う。無意味だなんて思わないよ」

「……そっか、ありがと」

心からの本心を口にした僕に対し照れたようにはにかむ少女。

どうにか重苦しい空気を脱し、僕はそっと安堵の息を吐く。

それにしても目の前の少女がここまで強い意志で夢を追っていたとは思ひもしなかった。『役割』とは別の仕事、つまりは副業だが、行っているのはこの世界では精々100人に一人が持っているかいないかといった所だった筈だ。

自分には到底持ち得ないアクティブさを前にして、少しばかり気後れしてしまう気持ちは確かにある。

だがそれ以上に、僕の中には目の前の少女を尊敬する気持ちが溢れていた。

それはかつて抱いて頂きを目指して、捨てたにも拘らず現在まで女々しくも惜しみ続けた、僕の夢が思い起こされる程に。

と、そんな事を考えていた僕の脳裏に、ふと疑問が浮かんだ。

「ってことはあれか、君が最初に言ってた職業体験とか学校の課題ってというのは……」

「ああ、あれ嘘だったの。なんか断られそうな雰囲気だったから咄嗟に。……もしかして怒ってる？」

「いや怒ってはいないけど……」

「実際職業体験って言われなきゃお兄さん断ってたでしょ？お兄さんすっごいめんどくさそうな顔してたもん」

「う……」

「まあ職業体験っていうのは嘘だったけどさ、恩返しがしたいって言ったのは本心だったよ？お給料は出ないけど、そういうの関係なしに助けてくれたお兄さんの役に立ちたかったから。清掃の仕事に抵抗がなかったわけじゃないけど、やってみたら案外楽しかったしね、嘘ついてよかったって今は思ってる。だからね、お兄さん」

少女はそこで一旦言葉を切り、身長差を埋めるように見上げる形で顔を上げた。

——彼女の澄んだ瞳が僕の目を捉えて離さない。

断言する、これは恋とか愛とかそういうのじゃない。

力のこもった鋭い眼差しは、真剣な色を伴って僕の心を刺し貫いた。

それはきっと——

「さっきはないなんて言ったけど、本当はお兄さんにも夢があったんでしょ？分かるよ。だって夢の話をしてた時のお兄さん、すっごく苦しそうな顔してた。憧れた夢を追って、歩いて、手を伸ばして、それでも届かなくて、挫折して、諦めて、それでも諦めきれなくて、苦しんでる人の顔。わたしも毎日のように鏡で見た顔。だからこそわたしが言うね。——お兄さんももう一度真剣に考えてみて。自分の望みを、夢を諦めないで。わたしも、諦めないから」

いつもニコニコしている印象の少女が、その時だけは安易な笑みを見せなかった。

——それはきっと、彼女なりの本当の恩返しだった。

帰ってきてすぐにやる事と言えば、コンビニで買ってきた弁当を電子レンジで温める事だ。

……だったのだが、どういった風の吹き回しか、テーブルの上には手作り感満載のカレーがライスと共に盛り付けられていた。

まあ手作り感も何も、実際に自分で調理したのだから当然ではあるが。

唐突に自炊を思い立ったのは他でも無い、少女の行動力にあてられたからだ。

別にシェフになりたい願望がある訳でも無し、これで何が変わる訳でも無いがなんとなくで挑戦してみようと思ったのだ。

市販のルーを使った以上誰が作ってもそう変わらないカレーを完食し、僕はずっと見て見ぬふりをしてきた扉に目をやる。

「―――」

その部屋はたまの掃除を例外とすれば、もう三年近くも入っていない。

用が無いのではない、ただ意識的に部屋にも視界にも入らないようにしていた。

もし少女と出会っていなければ、今も入ってみようかなんて思考は微塵も湧いて来なかっただろう。

けれど少女は挑んだ、きっとこれからも挑み続けるのだろう、であれば、僕はどうする。

「……開ける」

溜息を一つ、覚悟を装填して扉を開く。

意を決して開けたその部屋は、余人が見れば何の変哲も無い自室といった様相だ。

デスクトップPCの乗った机、腰の負担を軽減するという椅子、後は不自然な空間があるが、これは今は別の場所に設置しているベッドが元はここにあったからである。

そんな普通の部屋で、唯一変わった点があるとすればそれは部屋の三面を占領している本棚だろうか。

中身はぎっしりと小説で埋まり、僕でも把握しきれない冊数が蔵書されている。

昔は随分と読み込んだこの小説達も、今ではすっかり手に取る事も無くなってしまっていた。

多少懐古の念を催しつつ、僕は椅子に座りPCの電源を入れる。

しばらくしてホーム画面が映ると、以前の設定通りにとあるサイトが立ち上がった。

それは誰でも利用できる無料の小説投稿サイトで、この部屋を使っていた当時は毎日のようにログインしていた場所だ。

――お気付きかもしれないが、僕の夢は小説家になる事だった。

小説家を志し始めたのはいつの頃からだっただろうか、確か中学二年の時だったと思う。

当時から人とのコミュニケーションを苦手としていた僕は、幼い頃から母に絵本の読み聞かせをされていた事もあって本の虫で、毎日欠かさず図書室に通っていた。

そうして一か月で平均40冊を読んでいる内、次第に自分でも物語を夢想するようになったという訳だ。

本格的に執筆・投稿を始めたのは高校に入学してからで、その頃は実家のPCを使って劣等感を掻き消すようにがむしゃらに文字を打っては投稿し続けていた。

あの頃は背負うものも怖いものもまるでなくて、ただただ書く事それ自体が楽しかったように思う。

……だがいつからだろうか、僕の中で物語を綴る事が苦しい行為に変わってしまったのは。

人は承認欲求を持つ生き物だ、他人から一度評価を受けてしまえば視線が気になり、他者

と比較をしてしまう。

それまではただ創作する事に楽しみを見出していたのに、話を進めていくにつれ表現や語彙力の不足に苦悩し始めた。

すると最初は純粋な娯楽として、執筆を始めてからは参考として読んでいた小説と自分の作品を比べてしまい、劣等感に苛まれた。

理解出来るだろうか、それまで仲間入りが叶ったと思っていた人達が一瞬で敵になってしまう状況が。

分かっている、敵になったというのは所詮僕の思い込みに過ぎない、だがそれでも当時の僕には重荷だった。

それまで楽しかった創作活動が苦痛に変わり、読書から何年も離れてしまう程に。

そうして離れていた世界に、勇気をもたらした僕は再び戻ろうとしていた。

「……………」

いきなり書くような事はしない、ただ昔自分が書いていた物語を読み返していく。

拙い文章だ、勢いだけで書き連ねられていて起承転結も怪しく、人物の動きの表現もなっていない。

地の文と会話文のバランスも悪く、正直言って読み物として堪えられるものではないという風に感じた。

——けれど面白かった、自分の創作した物語として、当時の僕が心の底から楽しんで書いていた事が今になって理解させられてしまった。

昔の僕は今よりずっとエネルギーに溢れ、純粋だった。

昔の自分に少しだけ恥ずかしい気持ちを抱きつつ、僕は途中までで終わっている自作を読み進めていく。

「……ああ、ここで終わってたのか」

ふと気が付けば、既に以前投稿していた最後の部分まで読み終わってしまっていた。

最初の投稿から十年、それだけの年月読んでいなければ当然だが、新鮮な気持ちで没入出来て不思議な感覚だ。

自分の創作した物語を読む時はいつも校閲が主であり、娯楽として楽しむ機会は滅多に無い。

ある意味で貴重な体験と言えるだろう。

「……………」

六度、キーボードを叩く。

まずは試しにと文字を打ってみると、そこから頭の中に次々とフレーズが湧きだし始めて、それが零れ落ちないようにと急いで形にする。

キーボード上を指が軽やかに踊り、静かな部屋の中に絶えず打鍵音が響く。

これだ、この感覚だ、学生時代に僕が乗っていた波を、今の僕は確かに再び感じていた。後先は考えない、拙くても構わない、ただ今は書きたいものを書ければそれでいいという一種の開き直り。

だがそれで良かった、それで良かったのだ、細かい事など後からどうにでもなる。

僕は確かに過去の後悔を一つ乗り越え、新しい一步を踏み出したのだ。

それから朝日が昇るまで、その部屋では打鍵音が絶えず響き続けた。

「おはよう、お兄さん」

「ああ、おはよう。それじゃあ始めようか」

もう何度も繰り返したやり取りから朝は始まる。

結局少女は正式にうちでアルバイトをする事になった。

上は少女の『役割』を聞いて顔をしなかったが、最終的にはなんとか折れてくれた形だ。

少女はこれで普通の手段で開店資金を溜められるととても喜んでいた。

「あ、お兄さん。仕事始める前に……はいこれ」

「これは？」

「クッキー。流石にケーキは持ってこれないなーと思って代わりに。お昼にでも一緒に食べてよ」

「それはありがたいけど、どうしていきなり？」

「これはバイト掛け合ってくれたお礼。お陰でやっと社会で生きてるって実感がわいてきた気がしてさ。あとは試食かな。わたし、ケーキだけじゃなくて色々売りたいんだ」

「お礼を兼ねた試食、ね。なんともらしい強かさだね」

「あー、今わたしのことバカにしたでしょ。もしお店開いてお兄さんが来ても割引はやめだ

からね」

「してくれるつもりはあったんだ」

他愛も無い会話はいつも通り、ただお互いを深く知った事で壁か溝が取り除かれ、良き理解者として話せるようになっていた。

それはきっと友人や上下関係では安易に表せない、唯一無二の関係だった。

と、少女のクッキーを受け取って僕の中にある考えが浮かぶ。

「お礼って言うなら……じゃないね。——君に一つお願いがあるんだ」

「? ごめんなさい?」

「いやそういうのじゃなくて……良ければ僕の小説を読んで感想を聞かせてくれないかな?」

僕がそう伝えると、少女はしばらく意外そうな驚いた表情をしてから、

「そっちか。別にいいけど、わたし普段小説なんて読まないからちゃんとした感想なんて言えないよ?」

「それでもいいんだ。素直な感想が聞いてみたい」

「お兄さんがいいならもちろんいいよ。LINE でリンク送っといてね」

そう言ってひらひらと手を振り、少女は掃除道具を持って歩き出して行く。

執筆している時から言い出そうとしていた事を言えて、一先ず安堵の息を吐く。

書きたい、その衝動に突き動かされてた果てにあったのは、誰かに読んで欲しいというある種当然の欲求だ。

しかし随分投稿も間が空いて読者は離れ、現実にも勧めるような友人も居ない僕が、まず最初に思い付いたのが少女の事だった。

そこからどう切り出そうか今の今まで悩み続けていたが、どうにか自然に言えて何よりだ。

と、今はそんな事よりも仕事だった。

僕は思考を切り替えて袋を手に少女の背を追う。

すると少女は振り返り——

「—お兄さんの小説、楽しみにしてるね」

そう微笑んだ。

僕は少女に返すように意図せず笑みを返し、隣に追いつこうと一歩を踏み出した。

2024年8月13日 計15000字